

〔研究報告〕

イギリスにおける愛着に課題を持つ子どもたちへの対応と 日本の教育への示唆

—The Nurture Group Networkの視察を通して—

小玉 有子¹⁾、栗原 慎二²⁾、高橋あつ子³⁾、神山 貴弥⁴⁾
森 恵梨菜⁵⁾、宮村 悠⁵⁾、川崎七々海⁶⁾、壁谷 美穂⁶⁾、中田智佐子⁶⁾

要 旨

貧困を背景とする虐待増加が問題となっているイギリスにおいて、愛着に課題を持つ子どもたちに特別な支援を提供している The Nurture Group Network を視察し、Nurture Group の目的や活動内容、学校との連携や協働的な支援プログラム等に関して、情報収集し、その内容を検討した。Nurture Group では、教師と The Nurture Group Network から派遣されたスタッフが二人一組になり、「社会的・情緒的・行動的に困難を抱える子ども達を支援すること」を目的に、12の取り組みを行っている。また、教室環境を家庭的な安心感を伴うように再構築し、養育修復経験ができるように、カリキュラムも工夫されていた。課題のある子どものサポートを、外部の民間団体が請け負うのではなく、学校に入ってから、教師と連携してアセスメントからカリキュラムの作成、実践の評価まで一緒に行うということは、有意義な実践であると考えた。このようなプロセスを通じて、教師の子ども理解の視点は、確実に深まるであろう。Nurture Group の取り組みから、日本の通常学級担任と通級教師との協働についても、まだまだ検討する必要があると感じた。また、子ども達の多様な教育的ニーズに応えられるような、専門的で組織的なシステムの構築や、支援を担当する教師の力量向上のための研修プログラムの開発等の必要を感じた。

キーワード：Nurture Group、愛着障害、学校との連携

I. 問題と目的

近年の日本では、中学校、高等学校のみならず小学校においても、いじめ、不登校、非行問題、愛着障害（被虐待）、学級崩壊等、多様な問題や事件が多発しており、問題行動は低年齢化の傾向にある。このことは、早期から生徒指導が適切に機能する重要性を示唆している。2010年3月に文部科学省が「生徒指導提要」を作成し¹⁾、これを受けて2011年6月に文部科学省の生徒指導に関する教員研修の在り方研究会は「生徒指導に関する教員

研修の在り方について（報告書）」をとりまとめた。この報告書では、教師がそれぞれの立場・役割に応じた力量を身につけるための研修の内容や体系化だけではなく、国・教育委員会・学校の役割分担等、幅広い領域に関して検討されている²⁾。また、増田・松本・隅元（2007）は生徒指導が機能している状態を「全教職員が生徒指導の目的を理解し、生徒指導に関する共通認識のもとに教師の力量・資質を高め、実践できる状態のこと」と定義している。しかし、実際の現場では生徒指導に全校で取り組む基盤の弱さや、情報共有や役割分担、チーム支援

1) 弘前医療福祉大学（〒036-8102 青森県弘前市小比内3-18-1）

2) 広島大学大学院

3) 早稲田大学教職大学院

4) 同志社大学

5) 広島大学大学院 博士課程前期

6) 広島大学 教育学部

に対する教職員の共通理解の不十分さ、力量不足等の課題も残されている³⁾。今日、生徒指導上の問題は層複雑で多岐にわたっており、生徒指導においては、学校の指導体制・相談体制を不断に見直すとともに、教職員個々の資質・力量の向上や、関係機関等との連携を深めることが、ますます重要になると考えられる。

生徒指導の今日的課題の一つで、学校が対応に苦慮する問題として、愛着に課題を持つ子どもたちへの対応が取り上げられる。虐待を背景とする児童の心理・行動面の問題の支援や、家庭との連携には、緊急性と深刻度に見合った、学校をあげての多面的で総合的な支援が必要である。しかし、文部科学省（2006）の調査では、経過観察や児童及び保護者への指導等、担任中心の対応が多く、「学校を挙げて保護者や子どもへの指導など積極的な対応を行う」と回答した学校は、小学校15.9%、中学校14.4%に止まっている⁴⁾。これを踏まえ、文部科学省（2008）は、虐待などの困難な養育環境に置かれている子どもたちの問題を、発達障害等の子どもの問題と合わせて、「特別なニーズをもつ子どもたち」として、学校での支援体制づくりを進めていく必要性について述べている⁵⁾。また、西澤（2007）は、精神医療や心理療法だけで子どもの支援を行うことは困難であり、学校において「治療的教育の提供」が必要であることを指摘しており、学校の役割は大きい⁶⁾。

一方、イギリスでは、貧困等を背景とする虐待が多く、虐待件数は日本の15倍とも言われている⁷⁾。教育施策に関しては、1981年の教育法改正により、それまで「障害」として扱われてきたものを、「特別な教育的ニーズ」という概念で検討するようになった。また、1996年の教育法（Education Act、1996）では、「一般学校で、特別な教育的ニーズを有する子どもを教育する義務」を提唱している。学校は、発達障害に加えて、虐待等を背景とした愛着に課題を持つ子どもたちの心理・行動面の問題も含め、教育的ニーズを有する児童生徒一人一人に応じた支援を提供しなければならない⁸⁾。

その支援の一つとして、Nurture Groupがある⁹⁾。Nurture Groupは、子どもたちの発達に着目するとともに、虐待や両親の離婚など様々な育ちの問題を背景に、愛着に課題を持ち、社会的・情緒的・行動的に困難を抱える子どもたちを支援することを目的とした、学校を挙げての取り組みである。早期に養育の修復経験を提供することも重視している。この取り組みは、イギリスの教育水準局からも、子どものニーズを満たす実践として高い評価を得ている¹⁰⁾。

本研究では、イギリスでNurture Groupを総括する、民間の非営利団体（以下NPOと記す）The Nurture Group Networkを視察し、その実践や学校との協働的な支援

プログラムから、日本の近接領域での支援との違いを考察し、学校内で組織的・計画的に取り組む指導体制や、外部機関との連携システムに生かしていく方向性を考察することを目的とする。

Ⅱ. 研究方法

1 イギリスの実践についての視察調査

1) 視察調査日程と施設

2014年10月30日から11月4日の5日間、英国のロンドン市内にある、愛着に課題を持つ子どもたちの支援のために、学校と連携しているNPO The Nurture Group Networkを訪問した。

2) 調査方法

調査は、施設長・専門的スタッフ・研究者へのインタビューによって情報収集した。

3) インタビュー調査の観点

- i) 地域の特徴
- ii) Nurture Groupの目的・活動内容
- iii) 学校現場との連携

4) データの分析方法

インタビュー調査の結果をまとめ、内容について共同研究者間で確認した。その後、共同研究者間で、Nurture Groupの役割や課題、日本の近接領域での支援との比較、参考にできる点等を検討した。

2. 倫理的配慮

本研究の実施にあたっては、渡英前に施設長に視察調査の目的を説明した。また、インタビュー前にも、施設長・スタッフに情報・分析結果の使用目的を説明し、ICレコーダーでの録音、写真撮影および使用の許可を得た。

Ⅲ. 結 果

1. イギリスの現状

1961年以来、イギリスでは貧困率が増加し続けており、2020年にはその率は21パーセントになると言われている。これは同時に経済格差の拡大を示しており、子どもたちの学力に影響を与えているとされている。しかし、イギリスの教育に関わる行政機関は、経済格差と子どもの学力の関連について考慮しておらず、徐々に学力格差、問題行動などが深刻になりつつある。このような現状の中、子どもを取り巻く環境は年々厳しさを増している。例えば、問題行動を起こした児童生徒の「特別な教育的ニーズ」を把握するための診断は、保護者が経費を自己負担しなければ、受けることができなくなった。そのため、貧困家庭の子どもは、周囲の理解が得ら

れず、出席停止や退学を強いられているケースも少なくない。イギリスでは、学校の方針に従わない児童生徒を排除するために、出席停止の措置が用いられることが多い。出席停止を受ける子どもの数は、2006年からは下降傾向にあるが、現在でも352人/1万（約3.5%）の子どもたちが出席停止措置となっている。

The Nurture Group Networkは、全ての子どもたちは、適切な教育が受けられるようにすべきだと考え、子どもを出席停止にしたり、排除したりすることなく、学校現場の教師が子どものニーズを把握し、適切に支援することは可能であると提唱し、イギリスでも注目されている。

2. The Nurture Group Networkの概略

Nurture Groupを総括するThe Nurture Group Networkは、1969年、教育心理学者であるMarjorie Boxallによって創始された民間のNPOである。当時、多くの学校では、子どもたちの問題行動の背景や、発達障害を含む特性についても十分把握されておらず、問題行動を起こした子どもは、「学校生活に対応できていない生徒」として懲戒の対象となっていた。しかし、The Nurture Group Networkは、子どもたちがなぜそのような行動をとるのかを、発達心理の側面から見る必要があると考えた。

Nurture Groupとは、学校内に設置された、特別な教育的ニーズを持った8～10人の子どもたちと（その多くが愛着に課題を持っている）、大人2人（教師とThe Nurture Group Networkから派遣されるスタッフ）によって構成される学級である。虐待や両親の離婚など様々な育ちの問題を背景に、愛着に課題を持ち、社会的・情緒的・行動的に困難を抱える子どもたちなどを対象に、早期の養育の修復経験やスキルトレーニングを提供することで、情動のコントロールスキルや社会スキルを獲得させ、通常学級で適応できる状態にすることを目的としている。現在では、イギリス国内におよそ1500のNurture Groupがある。The Nurture Group Networkは、政府からの経済的援助を全く受けておらず、教員研修会の参加費、出版物・教材の販売によって得られた資金で運営されている。その他、教育現場の情報収集と公開、研究成果の発表も行っている。

Nurture Groupには、以下の6つの原則があり、これらを軸に運営されている。

- 1) 子どもの学びは発達的に理解されること（Children's learning is understood developmentally.）。
- 2) 教室は安全基地を提供すること（The classroom offers a safe base.）。
- 3) 子どもが自尊心を持つためには「育む集団」が重要

であること。教師が質の良い反応を子どもに返すことで子どもが自尊心を持つことができるようにすること（Nurture is important for the developmental of self-esteem.）。

- 4) 言語はコミュニケーションに欠かせない手段であると考えること（Language is understood as a vital means of communication.）。
- 5) 全ての行動はコミュニケーションであると考えること（All behavior is communication.）。
- 6) 子どもの生活において移行期は重要であると考えること（Transition are significant in the lives of children.）。

3. Nurture Groupの取り組み

Nurture Groupでは「社会的・情緒的・行動的に困難を抱える子どもたちを支援すること」を目的に、以下のような12の取り組みを行っている。

- 1) 教師が子どもと情緒的な絆を築くこと。教師は子ども1人1人のニーズを読み取り、子どもに愛情を持って接し、子ども達とポジティブな関係を築く。
- 2) 目標を設定すること。子どもの支援目標はNurture Groupが独自に開発したアセスメントツール『The Boxall Profile』の結果を元に設定され、目標に対する子どもの位置付けを振り返り・修正する。
- 3) 子どもにモデルを示すこと。Nurture Groupでは1つの学級に2人の教師が配属されている。2人という人数がポイントであり、2人の教師の建設的な関わりが子ども達にとってモデルとなるようにする。
- 4) 子どもの感情認知を養うこと。例えば、怒りを表している絵を子どもに見せ、これが怒りの感情であるということを考えさせる。
- 5) 子どもに報酬を与えること。子どもの行動を評価する、褒める、本やプレゼントを与えるなどの報酬を与えることで、良い行動を伸ばす。
- 6) ロールプレイングを行うこと。ソーシャルスキルトレーニングの中でロールプレイを行い、スキルを練習させる。
- 7) 子ども達に感情に関する学習を行うこと。子ども達が様々な感情を理解したり、区別することができるようにしたり、表情や状況を手掛かりにして、人の感情を読み取ることができるようにする。
- 8) カリキュラムの構成と課題の体系化。カリキュラムはNurture Groupの教師と通常学級の担任教師が協同し、The Boxall Profileの結果を元に構成する。さらに、Circle Timeという体系化されたSEL(Social and Emotional Learning)を行う。
- 9) 宿題を出すこと。Nurture Groupで学んだスキルを

生活の中で実践するという宿題を子ども達に課すことで、スキルの定着を図る。また、親と子どもが一緒に行う宿題を課し、親と子どもが関わる機会を意図的に仕組む。

- 10) リラックスする方法を教えること。活動中に、子ども自身が楽しい状態やリラックスしている状態を認識できるようにしたり、呼吸を整える方法などを教えたりする。
- 11) 親との連携。Nurture Groupで学んだスキルを子ども達に定着させるためには、家庭との連携が必要である。そのために、親もNurture Groupに参加させ、子ども達と一緒にお菓子を作るなど、子どもとの適切な関わり方を活動の中で教える。
- 12) 制限を設定すること。ネガティブな行動は無視したり、Traffic light systemやTime 'in' を活用したりする。

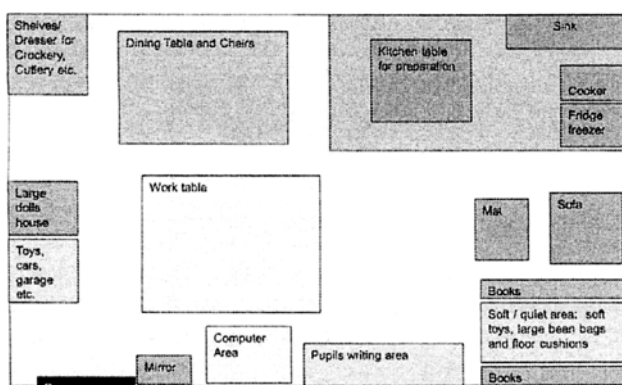


図 1 Nurture Group 教室の配置例

4. 教室の構造

Nurture Groupの教室は、学校内で、教師や子どもなど、誰でも気軽に訪れることができるような場所に設置されることが多い。教室は基本的には学ぶ場所だが、家庭的な環境を大切にしている。教室は、大きく4つのエリアに分かれている。「Living room area」にはソファや植物などが置かれ、家庭のリビングのように、くつろげる空間となっている。また、大切なアイテムとして鏡が設置されており、子ども達が鏡に映った自分の表情から自分の感情を客観的に見ることができるよう工夫がある。「Dining area」では、簡単な調理をしたり食事したりする。「Work area」では、主に作業を行う。「Quiet area」には、柔らかい床にぬいぐるみなどが置かれていて、気持ちの安定を図る場所となっている。Nurture Groupでは、子ども達が4つのエリアを区別・認識し、場所によってとるべき行動がわかるようになることを大切にしている。(図1)(写真)

Living room area



Dining area



Work area



5. Nurture Groupの時間割とカリキュラム

Nurture Groupの時間割は、朝、教師が通常学級に子どもたちを迎えに行くことからスタートする。9:20には子どもたちがその日の目標を確認したり、自分の気持ちを視覚化して交流したりするGroup Welcomeがある。その後、グループに分かれて学習や活動を30分くらい行う。次に、教師と子どもたちが一緒に軽食（おやつ）を作り、一緒に食べる時間が設けられている。食事時間は、Nurture Groupでは大切なプログラムで、食事を通して子どもたちの生理的欲求を満たし、ネガティブな感情が起きないようにしつつ、食べ物を分け合うこと、相手の気持ちを考えること、指示を聞くこと、マナーや衛生習慣を守ることなど、多くの望ましいスキルや習慣を学ぶことができるようになっている。最後のClosing sessionという活動では、子ども達がその日の目標に対する反省を行ったり、通常学級に帰る心の準備を整えたりすることができるようにしている。

カリキュラムについては、学年によってNurture Groupに参加する時間が違うので、通常学級の時間割を考慮して作られている。（表1）

表1 Nurture Group カリキュラムの例

	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday
Period 1	Nurture Group Y7		Anger management Y7/8/9		Nurture Group Y8/9
Period 2	Girls' self esteem Y9/10	Nurture Group Y10/11		Nurture Group Y10/11	Problem solving Skills Y8/9
Period 3	Communication skills Y7/8/9	Communication skills Y10/11	Boys' self esteem	Anger management Y10/11	
Lunch	Lunch	Lunch	Nurture Group (Social activity)	Lunch	Lunch
Period 4	Problem solving Skills Y7	Health Education Y10/11 (school nurse)	Meet with Educational Psychologist	Problem solving Skills Y10/11	
Period 5	Nurture Group Y8/9		Parent liaison and planning		Nurture Group Y7

6. The Boxall Profile

The Boxall Profileは、Marjorie Boxallが考案したアセスメントツールである。子どもの発達と支援ニーズを明らかにし、Nurture Groupのプログラムを受ける必要があるのか、またプログラム終了後に、通常学級に完全復帰できるのかを判断する際のアセスメントに使用されている。The Boxall Profileは、発達に関する項目 Developmental Strands、学校生活における妨げに関する項目 Diagnostic Profileの2つのセクションがある。それぞれ34項目（計68項目）から構成されており、子どもをよく知る教師によって、4（Yes, or usually）から0（Does not arise, not relevant）で評定される。the Developmental Strandsでは、主に肯定的な特徴が描かれ、Diagnostic Profileでは、学校生活の支障となる否定

的な特徴が描かれている。Nurture Groupに入れた方がよいと判断される子どもは、発達の度合いが低く、相対的に学校生活の支障となる否定的な特徴の得点が高くなる。得点に応じて児童のニーズ、目標、必要な支援が明確になり、教師は子どものニーズに応じた適切な支援が可能となる。適切なアセスメントを行いたい教師に対しては、The Nurture Group Networkが研修を提供している。

7. Nurture Groupに関する研究

Cooper, Arnold and Boyd (2001)、Cooper and Whitebread (2007)、Reynolds, Mackey and Kearney (2009)、Scott and Lee (2009)、Seth-Smith et al. (2010) らは、Nurture Groupと連携している89校と、連携していない50校に通う計1239人の生徒を対象に1、2学期の期間にわたり研究を行った。これら研究により以下の3つのことが明らかになった。

- 1) 5つの研究すべてにおいてNurture Groupに通った生徒の方が通常学級の生徒よりも、The Boxall Profileの得点が有意に改善された。得点が高いほど向社会的行動と正の相関があることを示すthe Developmental Strandsについては、これらの先行研究の結果、Nurture Groupの方が統制群に比べ得点が高いことが明らかになっている。さらに、得点が低いほど反社会的行動と負の相関があることを示すthe Diagnostic Profileの結果については、Nurture Groupの方が統制群に比べ得点が高いことを明らかにした。また、Strengths and Difficulties Questionnaire (SDQ) の得点もNurture Groupの方が統制群よりも有意に改善された。さらに、1年間という期間で見ると、Nurture Groupにフルタイム通った場合でも、パートタイム通った場合でも同じような結果が得られた。
- 2) 5つの研究すべてにおいて、社会的情緒的行動的困難 (SEBD: social, emotional and behavioural difficulties)を抱えた生徒は、Nurture Groupに通った方が社会的、情緒的機能と学力において改善するということが示唆された。
- 3) Nurture Groupに通うと通常学級に比べて学習時間が短くなるにも関わらず、学力が上がる、もしくは下がらないということがわかった。Nurture Groupに通う生徒の学力は様々であるにも関わらず、同じように学力が改善したという結果が得られた。

8. Nurture Group Networkの今後の課題

The Nurture Group Networkは、近い将来以下の課題に取り組むとのことであった。

- 1) 行政に対して、今より大きな影響力(人的、経済的)を持つようになる。
- 2) 研究調査を進め、根拠に基づいたアセスメントを行う。
- 3) 多くの学校が、インターネットを利用してThe Nurture Group Networkへアクセスできるようにする。
- 4) 全国的に推進できるNurture Groupのプログラムを完成させる。
- 5) 学校に対して、直接的にサポートしたり介入したりできるようにする。

IV. 考 察

1. 三次支援におけるNurture Groupの役割

イギリスは移民が多く、違いを受け入れられず、差別や排除が助長されてしまう風潮が、いまだに学校現場の子ども・教師の両者に存在している。また、500万人以上が最低所得賃金よりも低い水準の生活を強いられている。最低所得賃金よりも低い水準での生活が子どもに与える影響は大きい。例えば、Garbarino & Sherman (1980) は貧困な地域の社会的環境が子ども虐待の発生に関与するとして警告している¹¹⁾。2015年に入ってから、イギリスの生活水準は近年急激に悪化していると、イギリスエキサイトニュースは報じており、貧困層に潜む児童虐待問題は、ますます深刻化することが予想される。このような現状の中、学校現場では様々な問題が起きているが、学校や教師が対応困難な問題行動を起こす児童生徒は、出校停止措置となるケースも多い。筆者らは、今までに何度もイギリスの学校現場を訪問し、ピアサポートなどの一次支援を含めた包括的な生徒指導の実践や、日本も多くを学べるであろう革新的な取り組みを知ることができた。しかし、イギリスの教育現場の現状は、まだまだ厳しい課題を抱えていると言わざるを得ない。2014年7月現在の子どもの貧困率(mid2000)は、イギリスが10.0%なのに対し、日本は13.7%と高い値を示している。貧困層に潜む児童虐待問題や、それに伴う愛着に課題を持つ子どもたちへの対応は、近い将来日本においても、深刻な課題となり得るかもしれない。

虐待や両親の離婚など様々な育ちの問題を背景に、愛着に課題を持つ子どもたちに対する、学校とThe Nurture Group Networkの連携による三次支援は、日本には見られない革新的なシステムである。日本でも、教育・福祉・保健・警察等、行政機関間の連携は見られるが、全国規模で民間団体が学校に入り、長期にサポートを行うというシステムはない。課題の持つ子どものサポートを、外部の民間団体が請け負うのではなく、学校に入っ

て、教師と連携してアセスメントからカリキュラムの作成、実践の評価まで一緒に行うということが、有意義な実践であると考えている。このようなプロセスを通じて、教師の子ども理解の視点は、確実に深まるであろう。さらに、Nurture Groupの活動は、通常の教育にも影響を与え、三次支援の観点が活かされた教育へと質的に変化していくことが予想される。これは包括的生徒指導のあり方を考える上で、きわめて示唆に富むものである。

日本では、スクールカウンセラーが導入されているが、時間制限もあり、学校内で長期に教師と連携して、特別なプログラムを推進することは難しい状況にあるが、課題を持つ子どものアセスメントや、プログラムの開発等、教師と連携して行うことで、相互に多くを学ぶ機会を得ることになると考える。三次支援におけるスクールカウンセラーや外部団体の活用に関しては、既存の枠組みに捕らわれない、新しいシステムを模索することも必要であろう。

2. 安全基地での養育修復経験

愛着に課題を持つ子どもたち、特に被虐待経験を持つ子どもたちにとって、最も大切な課題は、安全が確保されることであり、大人に対する信頼感を再構築することである。そして、本来、幼少期から、家庭教育によって獲得できるはずだった様々なスキルを学び直す機会を得ることも、その後の人生に大きな影響を与える。Nurture Groupが掲げる6の原則と12の取り組みは、これらの課題解決のために、とても有意義であると感じた。Nurture Groupの教室の構造や時間割は、学習の場としてだけではなく、心理社会面の発達や情緒の安定という目的を意識したものであり、学校という枠組みに捕らわれない、画期的な取り組みである。Nurture Groupが、家庭が担うべき機能の一部を、積極的に担っていることがわかる。日本の学校が、Nurture Groupの取り組みをそのまま模倣することは困難だが、教員が養育者のような関わりをすること、教室環境の一部を、家庭的で安心感が得られるように再構築することなどは、現行の教育現場でも容易に取り入れられると思う。通級学級や特別支援学級を、子どもが安心できる環境に変えていく上で、有効な手立てとなるであろう。

Nurture Groupに関する研究結果で、通常学級に在籍している子どもたち比べて、学習時間が短くなるにも関わらず、学力が上がる、もしくは下がらないという結果が得られている。子どもたちの情緒の安定が、学習面にも大きな影響を与えていることがわかる。

3. 日本における類似の実践との比較検討

1) 通級における指導

愛着に課題を持ち、社会的・情緒的・行動的に困難を抱える子どもたちへの対応と、特別支援教育の関連についても、久しく指摘されており、愛着問題に関連した困難さは、第4の発達障害とも言われ、特定される障害の有無を超えた、包括的支援の体制が求められている¹²⁾。日本の教育システムにおいても、愛着に課題を持つ子どもたちは、特別な教育的ニーズのある子どもとして支援されなければならないと考える。特に、心理的要因により、通常学級の指導の他に、一部特別な指導が必要とされる場合は、通級による指導の対象となるであろう。

通級における指導では、Nurture Groupと同様に、通級審査会によるニーズの把握、指導場面ではモデリングや報酬を活用したSSTやSEL等の三次支援が行われている。また、保護者の教育相談や、在籍する通常学級担任とのコンサルテーションによって、家庭でのQOLや通常学級での一次支援・二次支援の充実が図られる。しかし、通級する子どものアセスメントは、心理検査等の導入により、認知行動面では充実してきているが、愛着や感情発達の領域は万全とは言い難い。Boxall Profileのように、発達の側面と生活に関する指標という2側面からの共通のアセスメントツールがあることによって、客観性が向上し、通常学級と通級学級間の共通理解も図られ、支援の質が向上すると考えられる。

日本の通常学級担任は集団基準で子どもを理解することが多く、生活への支障に感受性が高い。一方、通級担任は、発達の要素への感度が磨かれている。その違いを活かして連携するために、通級担任が在籍学級を訪問し授業観察をしたり、双方のエピソードを共有し実態把握したり、個別の指導計画を協同作成したり、評価を協働で行う等、様々な実践が行われている。しかし、主にコンサルテーションレベルで機能して、子どもに対し協働的に直接支援する体制はない。Nurture Groupの取り組みから、日本の通常学級担任と通級教師との協働についても、まだまだ検討する必要があると感じた。

最近の通級指導では、不登校ケースや虐待既往ケースも含まれ、多様なニーズが年々高まっているにもかかわらず、その担任配置は学校長による校内人事であるゆえ、特別支援教育の経験のある教師や、特別支援教育士などの専門的資格を有する者が配置される場合は少なく、専門性が担保されているとはいえない。各教育委員会が通級担任者を対象に行っている研修は、教育的な領域をカバーするにとどまり、心理社会的領域に関しては、教員個々の資質と研修意欲に依存していると言わざるを得ない。わずかに臨床心理士が配置されている通級もあるが、連携支援は十分とは言えない。もちろん通常

学級担任が、情緒的支援を学ぶ場も少ない。

そこで、Nurture Groupの実践から学び得たことで、日本でも試みが期待できることをあげることとする。まず、通常学級担任と通級担任が、チームで指導できる機会を作ることとは可能であろう。日常的で一定期間の実践は難しいが、放課後や長期休業中等を利用して実践することは容易だと思われる。そこでは、複数の支援者から共通の支援を受ける実感を、子ども抱かせる効果だけでなく、教師相互に学び、支援に関するスキルを向上させる研修効果も期待できよう。

2) 情緒障害短期治療施設と特別支援学級との協働

虐待によって施設処遇となった子どもへの支援システムでも、類似の実践がある。児童相談所が関わるケースについては、ケースワーカーを中心にケース会議が行われ、領域を超えた連携が行われているが、通常学級内の包括的支援との連動は不十分である。その点、情緒障害短期治療施設では、施設内に特別支援学級があることも手伝って、緊密な連携がなされている。そこには教育職、心理職、福祉職が協働し、ケアにあたっている¹³⁾。同様の実践を学校内で実現できた例もある¹⁴⁾。学区に児童養護施設がある学校で、協同的な学びやICT教育（情報コミュニケーション技術教育）を駆使して、授業改善に取り組み（一次支援）、朝自習の選択制や日本語教室による学習支援（二次支援）、三次支援（特別支援学級）を充実させていくことによって、荒れていた子どもの情緒が安定させ、学力をつけていく実践が報告されている。

しかし、このような虐待への対応に顕著な効果をあげている実践も、まだ各学校・組織の力量に負うところが大きい。The Nurture Group Networkの最も大きな存在意義は、広く国内をカバーするシステムであり、人材を養成する研修プログラムや子どもへのプログラムを提供し、なおかつ効果測定もする組織であることである。今後、日本においても、子ども達の多様な教育的ニーズに応えられるような、専門的で組織的なシステムの構築や、支援を担当する教師の力量向上のための研修プログラムの開発等、早期に検討されることを期待したい。

V. 謝 辞

本稿を執筆するにあたり、視察を快く受け入れてくださった、The Nurture Group Networkのスタッフ各位に深く御礼申し上げます。なお、本研究は、科学研究補助金・基盤研究（B）（No. 2333-0204、研究代表者 栗原慎二）の補助を受けて実施しました。

引用文献

- 1) 文部科学省：生徒指導提要について. 2010
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/22/04/1294538.htm
- 2) 文部科学省：生徒指導に関する教員研修の在り方について（報告書）. 2011
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/080/houkoku/1310110.htm
- 3) 増田美佳子・松本剛・隅元みちる：生徒指導研究. 第18号. 21-31. 2006
- 4) 文部科学省：「学校等における児童虐待防止に向けた取組について」（報告書）. 2006a
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/06060513/001/008.htm#001（2014.12.5 取得）
- 5) 文部科学省：「学校等における児童虐待防止に向けた取組について」（報告書）. 2006b
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/06060513/001/016.htm
- 6) 西澤哲：子ども虐待と学校の役割. 月刊学校教育相談. 20(2). 76-82. 2007
- 7) 川崎二三彦：イギリスにおける児童虐待の対応. 子どもの虹情報研修センター研究報告書. 2007 www.crc-japan.net/contents/guidance/pdf_data/h19_england.pdf（2014.12.5 取得）
- 8) Department for Education -GOV.UK: The Education Act. 1996 <http://www.legislation.gov.uk/ukpga/1996/56/contents>
- 9) Department for Education and Employment -GOV. UK: Excellence for all children Meeting Special Educational Needs. 1997
- 10) Ofsted Supporting children with challenging behavior through a nurture group approach. Ref. HMI 100230. London. 2011
- 11) Garbarino, J. & Sherman D.: High risk neighborhoods and high risk families The human ecology of maltreatment. Child Development 51. 188-198. 1980
- 12) 杉山登志郎：子ども虐待という第四の発達障害. 学研教育出版. 2010
- 13) 高田治：情緒障害児短期治療施設における二次障害への対応. 日本LD学会第22回大会教育講演. 2014
- 14) 原田浩司：特別支援教育の視点で授業改善・学校改革（第2回）学校改善の3本柱 生徒指導、授業改善、特別支援教育の質的改善 LD、ADHD & ASD. 明治図書. 2013

参考文献

- 15) Bennathan, M. & Rose, J.: All About Nurture Groups. London. The Nurture Group Network Ltd. 2012
- 16) Cooper, P., Arnold, R. & Boyd E.: The effectiveness of Nurture Groups: preliminary reseazrch. findings British Journal of Special Education, 28. 160-166. 2001
- 17) Cooper, P. & Whitebread, D.: The effectiveness of nurture groups on student progress: evidence from national research study. Enotional and Behavioural Difficulties. 12. 3. 2007
- 18) Reynolds, S., Mackay, T. & Karney, M.: Nurture groups: a Large-scale, controlled study of effects on development and academic attainment British Journal of Special Education. 36 (4). 205-212. 2009
- 19) Scott and Lee: Beyond the 'classic' nuture group model: an evaluation of part-time cross-age nuture groups in a Scottish local authority. Support for Leaning, 21 (1). 5-10. 2009
- 20) Seth-Smith, F.levi, N.,Pratt, R.,Fonaghy, P., & Jaffey, D.: Do nuture groups improve the social, emotional and behavioural functioning of at risk children?. Educational and Child Psychology, 27 (1). 21-34. 2010
- 21) 上田礼子：子どもの発達と地域環境：発達生態学的アプローチ. 発達心理学研究 23 (4). 428-438. 2012

Commitment to children with attachment disorder in England and its implication to the Japanese education

– In reviewing a visit to the Nurture Group Network –

**Ariko Kodama¹⁾, Shinji Kurihara²⁾, Atsuko Takahashi³⁾, Takaya Kouyama⁴⁾
Erina Mori⁵⁾, Haruka Miyamura⁵⁾, Nanami Kawasaki⁶⁾, Miho Kabeya⁶⁾ and Chisako Nakata⁶⁾**

1) Hirosaki University of Health and Welfare 3-18-1 Sanpinai Hirosaki Aomori Japan 036-8102

2) Hiroshima University

3) Waseda University

4) Doshisha University

5) Hiroshima University

6) Hiroshima University

Abstract

We visited the Nurture Group Network that supports children with “special educational needs” in England where problems of child abuse due to poverty are increasing. There, we learned about their purpose, activities, support programs in collaboration with schools, and we reviewed them in details. In the Nurture Group, a teacher and a staff member of the Nurture Group Network make a team to work on 12 tasks intending to support children with social, emotional, and behavioral problems. The classroom environment is restructured to create a sense of security just like a child’s own home, and the curriculum is designed to provide the children with restored nurturing experiences. It seems a very meaningful practice to work with school teachers who engage in various tasks from assessment of the situation, preparation of a curriculum and to evaluation of the practice, instead of outsourcing the much needed support for children with lots of challenges to a private company. Through this process, the teachers’ perspectives in understanding the children would be surely broadened. By observing the Nurture Group’s commitment, I felt that there might be a potential and needs for further review for the cooperation between homeroom teachers in regular schools and tutors for special courses. In addition, there seems to be great needs to establish specialized and organized system as well as to develop training programs for teachers to improve their skills to support the children in order to accommodate various educational needs for the children.

Key words: Nurture Group, Attachment disorder, Collaboration with school